

werden + 単純不定形の 発話形式とドイツ語について

十 河 健 二

言語による表現行為は、聴覚に作用するときも、視覚に作用するときも、常に何らかの時間的条件の下に置かれている。つまり発話行為の時点、発話内容そのものに関連する時間、及び発話内容が聴き手などに達する時点が重要な要素である。さらにこれらの少なくとも三つの要素が相互に作用し合ってでき上がる時間上の複雑な現象が認められるならば、これもやはり見逃せぬ点である。

ところで「思考」という精神作用を考えてみれば、これと言語との関連を研究することにはかなりの問題点があるので本稿では扱わない。デカルト (René Descartes) の言う「我思う、ゆえに我在り」(Cogito, ergo sum) という、思考による存在の肯定を最上位に置く、絶対に確実な認識では、あるいは言語の存在は必要ではないかもしれない。

しかしより高度な、そして抽象的で複雑な思考体系が構成される場合、言語の働きを認めないわけにはいかない。こうして使用される個別言語は、我々の生活の奥深く浸透しており、思想は言語によって表される。ここで知らなくてはならないのは、個別言語それぞれに言語的特性が、外面的にも内面的にも認められるということである。なるほど音声形式や文字形態、並びにそれらの体系に大きい相違が認められるが、大抵の言語には共通の区別、例えば品詞では動詞・名詞、文章形態では主語・述語などの区別が認められる。言語使用者である人間の言語による表現には、それら

の相違を超えた何らかの共通点があるようである。それはまた民族・人種を超える共通した体形、共通した発声器官を問題とするレベルであろう。

したがってこれらを基盤にして形成される個別言語の特性は、人間の思考に大きな影響を与えずにはおかない。つまり個別言語は、その使用者の思考世界を縁取る要素と見なすことができよう。

こうしたなかで、ドイツ語では一般に6種の時称体系を形成するとされ、かつまた語彙の面から言えば、時間の関連を示す前置詞・接続詞・副詞などの品詞分類を列挙することができる。

時称体系は態・法と共にドイツ語の表現体系では非常に重要且つ根本的な要素であることは言うをまたない。この点について、ドイツ語の動詞体系の解明に光明を投じたルップ (Heinz Rupp) は貴重な見解を述べている。

それは haben-Perspektive (これはブリンクマン ((Hennig Brinkmann)) によって既に言われたものである².), sein-Perspektive, werden-Perspektive, tun-Perspektive の4種の思考モデルによる動詞の全体的把握の試みである。このような思考モデルの創案について、ルップは次のように言っている。

「ドイツ語の動詞体系は単に語彙だけでなく、形式からも四つか五つの簡単な思考モデル——それは私が『視点』(Perspektive) と呼ぶものであるが——すなわち sein-, werden-, haben-, tun-Perspektive を基にしている。事実このような『視点』はドイツ語の動詞体系全体、つまり語彙と形式とを規定し、このことからドイツ語の動詞の形式の複合機能もまたよく理解できる、と言いたい³。」

tun はともかく、haben, sein, werden について我々はそれぞれの機能の二面性を熟知している。つまりいわゆる本動詞 (Vollverb) として用いられる場合と、助動詞 (Hilfsverb) として用いられる場合である。前者の機能で用いられるときは、存在・出来事・行為などを表現するという

純然たる動詞の概念に適合する。なおルップでは、この3種の表現を「過程」(Prozeß)としてまとめることが、この4種の「視点」を提唱する出発点となっている。

さて今「助動詞」と表現したが、これは非常に漠然とした分類表現である。sein, haben についてもその用法は多岐にわたり、様々な考察の可能性を提供するが、本論文では werden に焦点を絞る。これもまた種々の角度から観察の方法が見いだされるが、それは werden の現代ドイツ語における多機能性にも起因する。

例えば, „Langsam wurde ihm der Platz hier auf dem Balkon zum Pulverfaß.“ (H. W. S. 117) は、本動詞として werden を用いている⁴。

„Der Block halbrechts wurde weitermontiert.“ (H. W. S. 311) や „Als 1961 die Grenze in Berlin geschlossen wurde,...“ (H.W. S. 85) のような場合は、態を表示するための使用法であると、容易に認められる。

werden を助動詞として用いる場合の形式、すなわち werden+単純不定形 (Infinitiv Präsens), あるいは完了不定形 (Infinitiv Perfekt) の表現形式における werden をどのように特徴付けるかが、筆者の関心事である。特に単純不定形と共用される場合を論点の中心にすえ、これからドイツ語の存在様式に一つの考察を試みたい。

„Du wirst schon alles machen!“ (H.W. S. 82), „Ich werde nicht mehr darüber reden, Egon.“ (H.W. S. 100) というような用例で、werden について様々な論述の方向が開拓されるのである。

そこでまず、話法の助動詞 (Modalverb) の種類および伝統的な説明を挙げておこう。

「主語の表すものと動詞の表す事柄との間の話法的な関係を明らかにする⁵。」

「dürfen, können, mögen, müssen, wollen, sollen といった話法の

助動詞はそれ自体修飾された (modifiziert), すなわち特別な性格の出来事
を表現する。例えば能力 (Fähigkeit), 可能性 (Möglichkeit), 必然性
(Notwendigkeit), 意志 (Wille), 願望 (Wunsch), 不確定 (Ungewiß-
heit) である⁶。」

その一方で、「werden にも話法の機能 (Modusfunktion) があるとい
う命題を提唱する。また別な言い方をすれば、話法の助動詞であるとも言
いたい」とファーター (Heinz Vater) は提言している⁷。

この見解はザルトファイト (L. Saltveit) の研究に基づくところが大き
い⁸。

しかしドイツ語の話法の助動詞についての研究では、ほとんど例外なく
werden を外していたのである。この一方でドイツ語の時称やドイツ語の
動詞の体系全体では、werden と話法の助動詞との共通性や werden が
話法の助動詞に属する可能性を論じないわけにはいかなかったのである。
このことはルップの場合も例外ではない。彼の言う werden-Perspektive
には次のような解説が与えられる。

「werden-Perspektive は一般的な出来事そのものを表現する⁹。」ある
いは「werden-Perspektive は〔中略〕現在時称ではあるが——一部は少
なくとも——未来を示すのである¹⁰。」

研究分野によって、werden の扱い方に、一種のちぐはぐさが見られる。

「話法性とはある文で記述される事柄の一部ではない。それは事柄に付
加して表現され、内容的には放射状に広がるものである。〔中略〕話法性
は種々の文法範疇によって表される。つまり動詞の話法 (Modi)・話法の
助動詞・話法の形容詞 (möglich や notwendig のような) 及び話法の
副詞 (möglicherweise や vielleicht のような) によって表される¹¹。」

„modal“ という語の概念は、例えば「話法詞」(Modalwort) と言われ
る場合には、発話者の主観的判断・態度などに内容的に関連する。また
„Der Tisch ist aus Eichenholz.“ のように客観的な事柄 (素材など) の

表現に関連する場合もある。すなわち „aus Eichenholz“ の表現は「模態の規定語」(Modalbestimmung) と呼ばれる¹²。それに „Er kommt vermutlich zur Schule.“ のような用例では、発話者の主観性を „vermutlich“ は表す。

アドモニ (W. Admoni) によれば、話法の助動詞に見られる論理学的一文法的な話法性と、より一般的な意味で動詞の話法に見られるコミュニケーション的一文法的な話法性とは区別される。話法の助動詞に見られる話法性は、文の主語と不定形で表された行為との関係を言うのであり、動詞の話法に見られる話法性は、発話者が言い表した事柄とどういう関係にあるかを言うのである¹³。前者の定義は (先に引用した) *Grundzüge* による話法の助動詞の説明と共通することは明らかである。

これと対照的にライオンズ (J. Lions) では、「発話者が言う事柄に対する、その発話者の取る態度¹⁴」とのみ説明がなされる。しかしカルバート (J. P. Calbert) はライオンズの言う話法性をもっと細かく分ける必要があるという見解である¹⁵。すなわちライオンズの考え方では、発話者が一人称で発話行為を行うか、それ以外で行うかによって現れてくる識別が重要だと判断できる。

例えば, „Ich kann nur ein paar Tage bleiben.“ (H.W. S. 30) のような発話で, „nur ein paar Tage“ が発話者自身の判断に基づくことは容易に理解できる。 „nur ein paar Tage“ が発話者自身にとって明白な事実で, それに対して同一の発話者が können という話法の助動詞で一種の想定態度を表している。

また „Also wirst du zu morgen deine Hausaufgaben machen.“ (H.W. S. 167) では, „zu morgen“ が特に発話者の判断に基づくとは言え, werden に命令の意味合いが含まれていて, この点で命令法と競合する。

「推量を言い表さない werden の変形用法の二番手は, 命令を表現す

るものである。〔中略〕 werden を用いて表現した命令は命令法によるものよりも強くその効果が持続する。〔中略〕 werden のこの様な用法は sollen よりもまた強い¹⁶。]

さて例えば „...er wird wissen wollen, warum ich in Deutsch...“ (H. W. S. 293), „Noak wird mir auf der Seele rumknien.“ (H. W. S. 293) などの場合は, wissen wollen, rumknien によって表される動作は er および Noak が取るべきものであって, 発話者にとっては推量するほかはない。この「推量」という言葉は „Vermutung“ と表現される¹⁷。

ところでディーリング (Klaus Dieling) も言っているが, 未来時称は他の 5 種に比べて, 扱い方をいささか慎重にしなくてはならない時称形式である。それぞれに, 独自のまとまった意味や, グリンツ (Hans Glinz) の言う「基本的情報」(Grundinformation) を与えることは重要な課題だが, 未来時称だけは一筋縄ではいかない。未来時称が現在をも表すことができるという事実があるのを根拠に, 時間の表示作用を認めない言語学者もいる¹⁸。

また時称の概念規定は, 幾つかの研究成果から二つの型に分けられるとされる。

1) 時称は物理学上の時間と関連する。

この定義が見られる人々は, バル (W. E. Bull), バウムゲルトナー (K. Baumgärtner) およびヴンダーリヒ (D. Wunderlich) たちである。

2) 時称は物理学上の時間とは無関係である。

この定義が見られる人々には, ヴェーバー (H. Weber), ヴァインリヒ (H. Weinrich) たちがいる¹⁹。

加えて注目すべきはバルの考え方である。彼は同一のカレンダーを使用する者に共通した時間を「公共時間」(public time) と称し, これに対比

させて、個人と個人、状況と状況との間の異なる時間の流れを示す「個別時間」(personal time)を区別する²⁰。「公共時間」には時称の1)の定義と共通する点、「個別時間」には2)のそれと共通する点があると言える。

では発話時点・動作時点・観察時点とこの2種の時称概念、加えてバルの言う公共時間と個別時間との関連を見ることにしたい。

時称それぞれによって形成される3種の時点関連は、ほぼ明確に説明されている²¹。例えば „Dein Bruder Jonas wird müde sein! Micha, bitte deinen Onkel zu Tisch!“ (H.W. S. 9) では発話者はヨナス自身の状態を気遣っている。しかし判断は推量の域を出ない。この場合 werden に時称の特性を見いだすのはむしろ困難で、純然たる話法の助動詞と言えよう。発話時点・動作時点・観察時点はすべて重なり²²、現在時称と評価してもよいくらいである。したがって時間観念から論ずるのは冗長になると思われる。

„Von großer zukunftsweisender Bedeutung wird das Programm der Spezialisierung und Kooperartion der Volkswirtschaften der DDR und der UdSSR für den Zeitraum von 1980 bis 1990 sein,...“²³

この場合、 „für den Zeitraum von 1980 bis 1990“ は明らかに公に通用する時間の尺度であり、公共時間の特性が強い。werden はここでは本来の意味で将来の事柄を表現するために用いられ、真の意味での未来時称と言えよう。したがって観察時点は動作時点に重なり、これらは発話時点より後にある²⁴。

次には個別時間の要素が認められる発話内容を当然考えることができる。例えば、

„Die umfassende Zusammenarbeit mit der KPdSU und der Sowjetunion weiter zu vertiefen, wird ihr auch künftig vorrangiges Anliegen sein.“ (DDR. S. 263)

„künftig“ という表現は、発話者の主観性によってその具体的な時間の条件が変動する。仮にその時間の条件を明示しようとするれば、それは統一性の欠ける結果となろう。したがって具体化の困難な所に推量の余地が生まれるとも言えるのである。3種の時点の関連は上記の場合と同様である。

このようなことから公共時間と個別時間とを比較したときに、前者の方が後者より発話者の客観的特性が強く現われる場合があり、後者はその逆であると言えよう。これに比例して、werden の話法的性格に強弱の変動が見られるようである。

„Er wird sicher heute wiederkommen.“ (H.W. S. 215) の場合を考えてみよう。

werden はこの場合推量を言い表すであろうが、時間的条件では多少考察が必要である。heute によって表される時間上の条件は、発話者と聴き手との間で極めて具体的で、未来の事柄を表現するには必ずしも好都合と言えない面がある。heute は jetzt と同様に「現在」の表現で使われる語と説明されるからである²⁵。「未来」は出来事や存在を予告する表現形式であり²⁶、先に挙げた „Von großer...“ に始まる文のような用例があることを考えれば、この見解は一層分かりやすい。この場合の werden は直前に挙げた例文よりも更に話法性が強いと言わざるを得ない。それは „Er kommt sicher wieder.“ と発話することも十分考えられるからである。

それ故にこのような werden の用法を「婉曲表現」と称することができよう。すなわち、ウルヴェスタド (Bjarne Ulvestad) では „das epistemische Modalverb“ という表現が見られる²⁷。

このような婉曲表現が聴き手に与える心理的效果をテーマとして、ウルヴェスタドは、werden の用法を引き立てるために müssen の用法を傍証として用いる。すなわち、müssen は発話者が自分の想定を様々な状況から論理的に導き出すときに使用される。これに対して werden は、主

観的に確信していることを主題として扱い、その確信の根拠を挙げる
ことができないか、あるいはそうしようと発話者が思わないかのいずれかの
ときに用いられる²⁸、という論証を彼は行っている。また様態の副詞から言
えば²⁹、wahrscheinlich, vermutlich などが werden と、bestimmt,
sicher(lich) が müssen と共に用いられることが多いという点から、
確実さの程度では werden と müssen とには対照的な側面がある³⁰。

逆に言えば werden は、フエーターにも説明されるように不確実さの
程度を言い表すが、それは müssen よりも強く können よりも弱い³¹。
そこで次のような不等式が成立する。

können > werden > müssen

これに対してウルヴェスタドは、werden + 単純不定形の表現形式が中
程度の確実さしか常に表さないというのもまた正しくはない、と論ずる³²。
ウルヴェスタドによれば、発話者と聴き手との間で推定 (Annahme) の
正しさが、何らかの客観的な要因から疑う余地のない場合に、このような
ことが言えるのである。

登場人物ヨナスが、キエフで数学を研究していて一時帰国中の学生とそ
の恋人のことを考える場面に、

1) „Fünf Jahre werden sie getrennt leben, sehen sich in jedem
Jahr ein paar Tage und streiten sich, dachte Jonas.“ (H.W. S. 30)
というくだりがあるが、この werden は、二人の離れ離れの生活という
余人でもたやすく理解できる事実を背景にして用いられている。このよう
な werden は確かに助動詞、しかも話法の助動詞であり、かなりの程度
の確実性を表すことができ、時間の関連はむしろ少ない。

一方、次のような場面を考察しよう。登場人物フォルツナス (Fortunas)
がブダペストから故国 DDR へ何日ぶりかで帰国した日の朝、妻に朝食の

際に言う言葉：

2) „Wenn man oft im Ausland ist, werden die kleinen Probleme zu Hause unwesentlich.“ (H.W. S. 116)

ここではフォルツナスの外国での生活体験と自宅を留守にするという厳然たる事実とを発話の要因の一つと見ることができ、聴き手である妻にとっても夫の発話内容の背景は十分に理解できるに違いない。

これらの用例から判明することは、werden の特性は、「推量」や「想定」などの話法性が強く前面に出、それだけ時間の特性が目立たなくなっているということである。

„werden ... unwesentlich“ の例における werden は „werden ... leben“ と違って、通常自動詞に分類される。しかし発話者と発話内容の関連、更に発話内容の主体と発話内容との関連、そしてこれら3要素の関連を考えると、werden はその内面的能力ではいずれの場合（ここでは1と2）も同一であろう。

また「品詞」という表現はよく知られた語の分類手段であるが、このそれぞれを厳密に定義することは極めて困難であろう。例えば副詞(Adverb)と総称される語群中の auch と gern の間には外面的・内面的な共通点は少ない。したがって「品詞」という分類も好都合な面もあるが、やはり不便な面も残っている。

一般に「助動詞」と言うときは、時称・態などの表示に用いられるもの、scheinen, glauben, beginnen, aufhören, drohen, pflegen などの動詞のように助動詞としての価値も認められしかも話法性が見られるもの³³、及び伝統的な意味で話法の助動詞と呼ばれるものが含まれる。

さて、状態または出来事を描写する動詞(Aussagewort)(エルベン)に今列挙した語が組み入れられるが、これらを動詞(Verb)・助動詞、更に話法の助動詞にはっきりと区別することには困難な一面が認められよう。特に werden のように、同一語が複数の機能を有する場合にはなお

さらのことである。

さて、1) では2人が別れて生活を送る事態に対するヨナスの心理的態度、2) では家庭内のこまごまとした問題など取るに足りないという事柄に対する発話者フォルツナスの心理的態度が、werden の使用に表れていると言える。それぞれの内容は客観的に見てほぼ確実な事柄なのだが、発話者それぞれにとって werden を使用するに十分な理由があったのである。言い換えると、そのような事柄に対して 幾らか心理的に距離を保った、言うなれば思慮を働かせた上での発話であると言外に示したかった発話者の意図を汲み取ることができよう。

コミュニケーションができる人は誰でも文法的に正しくそれ故に理解できる表現をすることを学んだだけではなく、どのコンテクストではどのような表現が可能で、またそれをどう理解するかを習得している³⁴。

そして言語の現実化 (Realisierung) のレベルを考えたときに、当然コセリウ (Eugenio Coseriu) ・ポーレンツ (Peter von Polenz) ・モーザー (Hugo Moser) たちによって論じられるノルム (Norm) と無関係ではないことが明らかとなる³⁵。ノルムは最近ではコセリウによってまず音韻論の分野から提示された。コセリウはスペイン語の母音の発音の長短に着目し、長母音化をノルムの現象とした。また形態論的・統語論的にも、体系 (System) —ノルム—発話 (Sprechen) の三重構成が確認されたのである³⁶。ポーレンツはノルムを言語変遷の心臓部に位置させ、言語観察には必要欠くべからざる要素としている³⁷。

社会的・潜在的な言語体系 (Sprachsystem) で考えられる言語のノルムは言語の用法 (Sprachgebrauch) と並行して認識され、前者は後者に比べて一般的通用性と拘束性が強い。言語活動は、それがどのようなものであれ、この言語のノルムなくしては十分ではない。すなわち werden の各種の意味内容とこれに関連する用法は、辞書により知ることができる。しかし実際の運用ともなれば、現実化を直接支配するある種のルール、つ

まりノルムが不可欠である。マース (Utz Maas), ヴンダーリヒらは、正にこの点を語用論 (Pragmatik) の面から指摘するのである。werden も用法上のノルムの下で確実に使用され、そこに、言語使用者に形成される心理面および精神面の反映を垣間見ることができる。「推量」を表現するために用いられる werden には、不確実性を表す機能があることには既に言及した。

厳密に言えば、現在の範囲で言語使用者は確信を持って発話し、また誤たずに認識・判断ができる。すなわち言語使用者の直接の体験や言語使用者にとって信憑性のある情報がそのために必要である。絶対的な時間の概念からすれば現在は瞬時であるが、言語表現ではコンテキストによって、また言語使用者によって様々な幅が認められよう。

時間的連続の点から言えば、現在のものは休止することなく過去のものとなり、それに遅れることなく未来のものが現在のものとなっている。言語使用者はある事柄を、常に時間的連続の中でとらえなくてはならない。この時間的連続が一般に認められ公の時間の尺度に合致する場合には、先述の公共時間の概念が相応するであろう。また合致の程度が少なくなるにつれて個別時間の色彩が濃くなると言える。客観的な時間の流れや事柄の生起は一つしかなくとも、それを観察する者やそのことを発話する者にとって、時間の世界は必ずしも客観的・絶対的な時間の流れとは一致しない。これが主観性の原点であろう。

„Aber in viereinhalb Jahren ist er ja fertig.“ (H.W. S. 30) では、明らかに „in viereinhalb Jahren“ という副詞規定 (Adverbialbestimmung) から、かなり遠い将来の事柄であると一般に判断される。しかし発話者ジャンヌ (Jeanne) にとって、これに不確実性や推量の話法性を加える必要はない。もちろん未来の事柄が間接的に表現されてはいるが。

この「不確実性」という点では、過去および完了形では様子が変わって

くるので、少々このことに言及したい。

周知のように完了形には「完了時称」(Perfekt)と「過去時称」(Imperfekt)とがある。

「判断をし、話し合いをし、その成り行きを見、私と話の聞き手のために結論を持ち出すときは、私は完了時称を用いる。そのようなことにはならず、また事柄を言うだけで済み、両者がそれぞれに自分の意見を言うまでには至らないときは、過去時称を用いる³⁸。」これがトゥリーア (Jost Trier) による両時称の用法上の相違である。

またトゥリーアは、ミュンスターに居住しその地で成人した中年の男性がコーブレンツ在住の甥の訪問を受けたときの様子を挙げ、言語使用上のレベルから観察している。

伯父 : Na, was hast du denn heute morgen gemacht?

甥 : Ich war in der Stadt gewesen.

この昼食時の伯父と甥との会話についてトゥリーアは、甥は過去完了を使う必要はなく、これは過去と現在完了とから混成された、との判断を下している。すなわち日常会話に見られる時称形式上の一種の不確実性の結果である、と結論付けている³⁹。

しかし形式上の不確実性は、ここでは発話者自身の体験に範囲が絞られるために、内容にまでは影響を及ぼさない。もちろん一般に発話者が過去の出来事の推量・想定などを表現する場合には、werden + 完了不定形の形式も一役買うことはよく知られている。

ところで、

„Deine Oma wird schon zurückkommen.“ (H.W. S. 123)

→* „Deine Oma wurde schon zurückkommen.“

のような変化は成立せず、この一方で、

„Die kleinen Probleme zu Hause werden unwesentlich.“

→ „Die kleinen Probleme zu Hause wurden unwesentlich.“

のような変化は成立する。しかし後者の用例の過去時称では、推量の話法性は、現在時称の場合と異なって減少すると見るのが妥当であろう。werden の話法性に固執するならば、後者の用例においてもこのような変化が成立しないことになろう。ともあれ現在時称でしか werden+単純不定形の形式が使用されない点は、話法性の werden の特徴であり、このことはフアーターやウルヴェスタドそれにディーリングたちの理論からも明白である。

また werden の話法性を機能によって分類すると、内容的話法性と語形に表される話法性の2種がある。

1) ...als ihm seine Tochter Jeanne eines Tages mitteilte, sie würde auf Martin warten, ... (H.W. S. 141)

2) Nachdem Großmutter verkündet hatte, daß sie nun öfter in dieses Café gehen würde, ... (H.W. S. 151)

3) Mannon würde sich nie wieder vor der Mutter fürchten, ... (H.W. S. 129)

4) Sicher würde sie nur noch lächeln können, wenn die Mutter sich in Zukunft um Strenge bemühen sollte. (H.W. S. 129)

このように、例示した表現形式が頻繁に見られるということは、逆に言えば話法性自体の大きさを物語るものである。つまり語彙の種類だけでなく、語形変化、シンタクス的な要素など、様々なレベルで話法性が表現されるのである。

話法性の具体的な内容として、現実性(Wirklichkeit)・蓋然性(Wahrscheinlichkeit)・可能性(Möglichkeit)・推量(Vermutung)・不確実性(Unsicherheit)・不安定(Ungewißheit)・非現実性(Nichtwirklichkeit)・請願(Bitte)・命令(Befehl)などを挙げることができる⁴⁰。だがそれらの中で werden+単純不定形の形式が担当し得るのは蓋然性・可能性・不安定・不確実性・推量・命令などであろう。

接続法と関連させて werden+単純不定形の形式を考察する場合、それ

故に動詞の話法形式だけでは賄いきれない話法性を接続法は表すという点が、浮かび上がってくる。このことは、werden をフーターたちの言ったように、話法の助動詞と見るならば、なおさら合点がいく。

これまで展開してきた論述の内容は文法的特性が顕著である。その場合、このような理論が展開されるその位置を確認することは重要であろう。客観的な視点は常に意味があり、新しい展望の可能性を提供する。

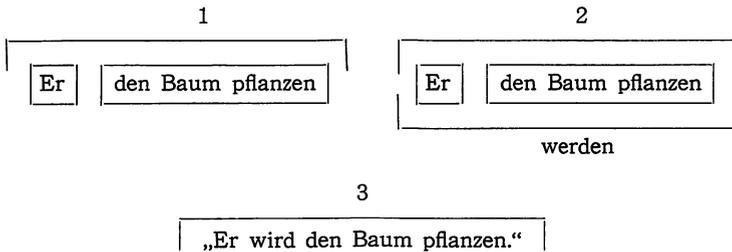
文法的である以上は、言語をエルゴン (Ergon) として把握する範囲を出るものではない。そしてこれを不可避の関門とする考え方として、当然エネルゲイア (Energeia) としての言語という対象が顕在化する。かつまた文法的研究はそれなりの目的・価値を有することは誰も認めるところである。よく言われるように、言語的なものを意識させようとする人は、言語的「形成体」を十分に理解することから始めなくてはならない⁴¹。これが正に言語研究の第一段階である。

このことは言語共同体 (Sprachgemeinschaft) というとらえ方からも、言語の「現実性」 (Wirklichkeit) を精査するために必要な段階である⁴²。そして werden という1個の限られた言語的存在物をテーマに取り上げてみても、「werdenの表現の世界」と言ってもよいものが暗示されるであろう。werden の用法では、文法的特性として「受動」・「未来」という表現が代表的であろう。しかし「話法性」も十分認められる現実化が確認できる以上、これも加えるべきかもしれない。しかしこのような熟語の羅列に終始するならば、werden の真の解明にはほど遠いと言わざるを得ない。

言語の世界像の存在がヴァイスゲルバー (Leo Weisgerber) によって論証され、客観世界との間に介在する言語の中間世界 (Zwischenwelt) が明らかになった。そして、werden を単純不定形と共に用いるとき、werden は客観世界に対する発話者の態度を表示する語 (表示詞とも言えようか) ということになる。客観世界に生起する事柄に対する発話者の精神

的作用の様式表示の一翼を、このような werden は担うようである。werden 一つに限っても、文法的なものを超えて、母語の作用する力の理解に近づく道が見いだされるのである⁴³。

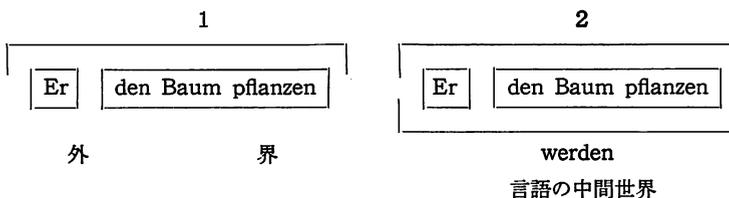
werden + 単純不定形の表現形式が客観世界の出来事に対してこのような役割分担を引き受けるということから、次のような推論が可能であろう。まず具体例から：



1は「彼が木を植える」という客観世界の事柄（出来事）である。2は「彼が木を植える」という客観世界の事柄に対する、werden を用いての発話者の態度表明である。3は „Er wird den Baum pflanzen.“ と発話する段階である。このような分類整理から、またこの作業が言語活動の基本に添う以上、ドイツ語の存在様式へと理論を展開することができる。

概念を対峙させ視点を拡大する意味で、ヴァイスゲルバーとコセリウの概念を取り上げてみたい。この両者の理論の骨子からドイツ語の存在様式を考察することになる。

1は外界（Außenwelt）内の現象であり、2は1に言われる現象のとらえ方であり、主観性が現れてくる。3は音声形式による現実化である。



„Er wird den Baum pflanzen.“

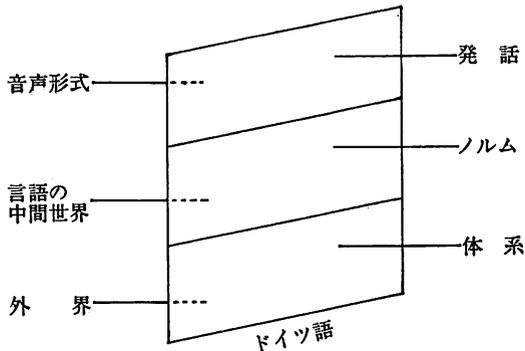
音 声 形 式

この図からは個別言語と言語使用者の精神・心理面が理解されるだけである。これと対照させてコセリウの三重構成を考えてみる。客観性・主観性の増減を見るとき、潜在的存在である体系に主観性を求めるのは困難であり、これは極めて抽象的である。一方発話に客観性を求めることができ、主観性もまた同様である。そしてこれは極めて具体的である。

ドイツ語の存在様式から見れば、体系はノルム・発話にとって不可欠の存在である。これは精神面から言われる「外界」が、言語の中間世界及び音声形式に対するのと同様である。ノルムは発話に制御力を有する。同時に言語の中間世界も実は音声形式にとって制御力があると言えよう。

意味内容文法では音声形式は語の意味内容と関連が深く、言語共同社会内でそれは自由に使用（現実化）される。しかしそれはあくまで言語の中間世界の手綱さばきの内にある。発話活動も同様にノルムの影響下にあるのは明らかである。

このようなことからドイツ語の存在様式を1枚の紙に例えるとき、少なくともヴァイスゲルパーとコセリウの言語理論下では次のような概念対峙が考えられよう。



言語使用者にとって、言語の中間世界の映像と外界は通常等しいとされがちである。同様に体系が存在することは概念上確認されても、ドイツ語の実際の使用がそのまま、ドイツ語の姿であると一般には受け取られやすい。すなわちノルムによる発話そのものがドイツ語の姿である、という見方が容易になされる。この図はそのような一種の錯誤に何らかの制動をかけようと試みるものである。

注

- 1 Vgl. Heinz Rupp, *Zum deutschen Verbalsystem*. In: *Sprache der Gegenwart*, Bd. 1, 1965, S. 140ff.
- 2 Vgl. Hennig Brinkmann, *Die Haben-Perspektive im Deutschen*. In: *Sprache—Schlüssel zur Welt (Festschrift für Leo Weisgerber)*, Düsseldorf, 1959, 176ff.
- 3 Rupp, a. a. O., S. 164.
- 4 Hans Weber, *Einzug ins Paradies*, Berlin, 3. Auflage, 1981, S. 117. なお引用される例文の多くはこの作品による。その場合引用文の直後に H. W. およびページ数を付記する。
- 5 Karl Erich Heidorph u. a., *Grundzüge einer deutschen Grammatik*, Berlin, 1981, S. 536.
- 6 Walter Jung, *Grammatik der deutschen Sprache*, Leipzig, 1966, S. 189.
- 7 Heinz Vater, *Werden als Modalverb*. In: Carbert, Josef / Heinz Vater, *Aspekte der Modalität*, Tübingen, 1975, S. 74.
- 8 L. Saltveit, *Besitzt die deutsche Sprache ein Futur?*. In: *Deutschunterricht*, 12, S. 46ff.
- 9 Rupp, a. a. O., S. 155.
- 10 Ibid., S. 162.
- 11 Vater, a. a. O., S. 104.
- 12 拙論『副詞規定の諸問題について』関西大学『独逸文学』 第29号 6ページ参照。
- 13 Vater, a. a. O., S. 104.
- 14 Ibid., S. 185.
- 15 Ibid., S. 105.
- 16 Ibid., S. 123.
- 17 Ibid., S. 112.
- 18 Klaus Dieling, *Das Hilfsverb „werden“ als Zeit- und Hypothesenfunktor*,

In: *Zeitschrift für Germanistik*, Jg. 3, 1982, S. 325.

- 19 Vgl. Vater, a. a. O., S. 75.
- 20 Vgl. Ibid., S. 76.
- 21 例えば, Helbig/Buscha, *Deutsche Grammatik*, Leipzig, 1972, 邦訳『現代ドイツ文法』在間進訳 三修社 1982年, には発話時点 (Sprechzeit)・動作時点 (Aktzeit)・観察時点 (Betrachtzeit) の3時点が時称それぞれの下で考察されている。
- 22 『現代ドイツ文法』162ページ参照。
- 23 Heinz Heitzer, *DDR, Geschichtlicher Überblick*, Berlin, 1979, S. 281. なお本文中の次の用例も同書から引用した。
- 24 『現代ドイツ文法』163ページ参照。
- 25 Vgl. Vater, a. a. O., S. 82.
- 26 Vgl. Johannes Erben, *Deutsche Grammatik, Ein Abriß*, München, 1980, S. 98.
- 27 Vgl. Bjarne Ulvestad, *Die epistemischen Modalverben werden und müssen in pragmatolinguistischer Sicht*. In: *Pragmatik in der Grammatik*, 1983, S. 262ff. „epistemisch“を「認識論的」とする面がある(『ドイツ文学』日本独文学会 74号 4ページ参照)ものの, アンダーソン(S. R. Anderson)の用語である epistemic (英)が「陳述緩和の」と訳されているので(『新言語学辞典』安井稔 研究社 1981年 159ページ参照),これを根拠に「婉曲表現の」とした。
- 28 Ulvestad, a. a. O., S. 269.
- 29 『現代ドイツ文法』では『話法詞』(Modalwort)として1項目設けて整理されている。
- 30 Vgl. Ulvestad, a. a. O., S. 272.
- 31 Vgl. Vater, a. a. O., S. 113.
- 32 Vgl. Ulvestad, a. a. O., S. 280.
- 33 Vgl. Jung, a. a. O., S. 190.
- 34 Utz Maas, Dieter Wunderlich, *Pragmatik und sprachliche Handeln*, Dritte, korrigierte und ergänzte Auflage, 1974, Frankfurt, S. 123.
- 35 „Norm“に関する論文として次のものが挙げられる。

Eugenio Coseriu, *Sprachtheorie und allgemeine Sprachwissenschaft*, München, 1975. 邦訳『言語体系』原 誠他訳 三修社 1981年。

Hugo Moser, *Sprache-Freiheit oder Lenkung?*. In: *Duden Beiträge*, Heft 25, Mannheim, 1964.

Peter von Polenz, *Sprachnorm, Sprachnormung, Sprachnormenkritik*, In: *Wege der Forschung*, Bd. CCCXLIV, 1982, S. 3ff.

また拙論『二言語併用の問題における「規範」の概念について』関西大学『独逸文学』第25号 71ページ参照。

- 36 Vgl. Coseriu, a. a. O., S. 64ff.
- 37 Vgl. von Polenz, a. a. O., S. 373ff. および拙論『言語学における „Norm“ の概念』『大阪体育大学紀要』第15巻 95ページ参照。
- 38 Jost Trier, *Unsicherheiten im heutigen Deutsch*. In: *Sprachnorm, Sprachpflege, Sprachkritik*, Jahrbuch des Instituts für deutsche Sprache, Bd. 2, 1968, S. 12.
- 39 Vgl. Ibid., S. 12.
- 40 Vgl. *Grundzüge*, S. 536.
- 41 Vgl. Leo Weisgerber, *Grammatik im Kreuzfeuer*. In: *Das Ringen um eine neue deutsche Grammatik*, 1973, Darmstadt, S. 6.
- 42 Vgl. Weisgerber, *Die Erforschung der Sprachzugriffe*. In: *Das Ringen um eine neue deutsche Grammatik*, 1973, S. 21ff.
- 43 Vgl. Weisgerber, *Kreuzfeuer*, S. 17.

Über die Sprechform „werden+Infinitiv Präsens“ und die deutsche Sprache

Kenji Sogo

Das Wort „werden“ wird im allgemeinen Sinne nicht zu den Modalverben gerechnet. Nur die Wörter: können, dürfen, müssen, sollen, wollen und mögen, werden als Modalverben aufgeführt.

Nach Heinz Vater ist die Modalität nicht Bestandteil des in einem Satz beschriebenen Sachverhalts, sondern etwas, was zusätzlich zu diesem Sachverhalt ausgedrückt wird. Konkret gesagt, man kann die Modalität nach Kriterium differenzieren wie: Wirklichkeit, Wahrscheinlichkeit, Ungewißheit, Vermutung, Unsicherheit, Nichtwirklichkeit, Bitte und Befehl. (*Grundzüge*)

Wenn hier die Sprechform „werden+Infinitiv (besonders Infinitiv Präsens)“ einige der obengenannten Modalitäten wie Wahrscheinlichkeit, Vermutung, Befehl und Unsicherheit bezeichnet, dann können wir uns der Ansicht Vaters anschließen, „werden“ gehöre auch zu den Modalverben.

Hier betrachte man einige konkrete Sätze.

1) Ich werde nicht mehr darüber reden, Egon.

In diesem Fall bezeichnet „werden“ einen Willen des Sprechers. Es ist wahrscheinlich nicht gerechtfertigt, in diesem „werden“ ein Futur zu erkennen, es sei denn, daß dieser Satz mit einer zeitlichen Adverbialbestimmung verbunden wäre.

2) Also wirst du zu morgen deine Hausaufgaben machen.

„Werden“ im 2. Satz kann dem Hörer einen Befehl inhaltlich mitteilen, der nach Heinz Vater so charakterisiert wird, daß der mit Hilfe von „werden“ bezeichnete Befehl nachdrücklicher und beharrlicher ausgedrückt ist als der durch einen Imperativ.

Der Begriff des „Tempus“ wird auf zweierlei Weisen bestimmt.

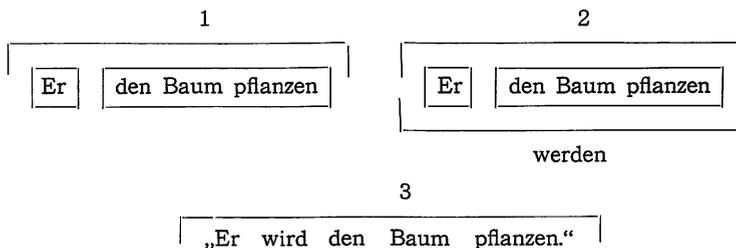
- 1) Tempus hat etwas mit physikalischer Zeit zu tun.
- 2) Tempus hat nichts mit physikalischer Zeit zu tun.

Für die 1. Bestimmung entscheiden sich Forscher so wie W. E. Bull, K. Baumgärtner und D. Wunderlich, für die 2. Bestimmung H. Weber und H. Weinrich. (H. Vater)

Allerdings kann „werden“ in Verbindung mit dem Infinitiv sowohl als Modalverb als auch als temporales Hilfsverb funktionieren. Hier muß man immer unterscheiden, welches Element in der Sprechform „werden+Infinitiv Präsens“ vorrangig ist.

Es sei angefügt, daß Leo Weisgerber die Sprache als *Energieia* auffaßt. Bei Weisgerber ist die Sprache immer die die Welt erschließende Sprache, mit deren Funktion die sprachliche Zwischenwelt gebildet wird. In der objektiven Welt, die nach Weisgerber „Außenwelt“ genannt wird, besteht lediglich Geschehen oder Sachverhalt.

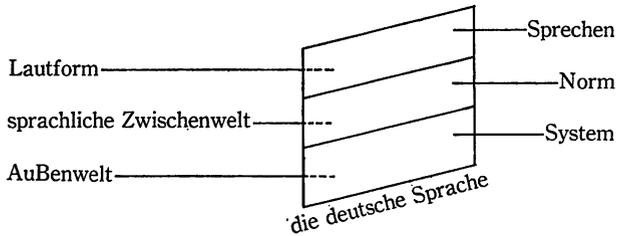
Wir haben den Zugriff zu diesem Geschehen oder Sachverhalt stets nur durch unsere subjektive Perspektive. Am konkreten Beispiel:



Bei 1 wird ein Geschehen in der Außenwelt bezeichnet. Bei 2 wird das bei 1 bezeichnete Geschehen vom Modalverb „werden“ verfärbt; also gehört dieses Beispiel zur sprachlichen Zwischenwelt. Bei 3 findet ein Sprechakt, „Er wird den Baum pflanzen,“ statt. Es handelt sich um eine Lautform.

Aus diesem Diagramm kann man nur eine Beziehung von Sprechakt zur geistigen Seite der Sprache herstellen. Um das

Blickbild zu erweitern, möchte ich die Sprachtheorie Coserius, besonders seine Trichotomie : System—Norm—Sprechen, einführen. Hier kann man m. E. über die deutsche Sprache eine Übersicht gewinnen, indem man die entscheidenden Begriffe miteinander konfrontiert.



Zu diesem Diagramm möchte ich eine einfache Erklärung hinzufügen. Norm und sprachliche Zwischenwelt haben beide eine beherrschende Kraft über Sprechen oder Lautform. System und Außenwelt sind die Grundstufen, durch die die anderen Stufen gebildet werden können. Diese Stufen sind sehr objektive und abstrakte Begriffe. Nähmen wir die deutsche Sprache als ein Stück Papier an, dürfte dieses Diagramm eine gewisse Überzeugungskraft haben.